

「地上の星」と「地中の星」

「地上の星」は言わずと知れた中島みゆきの名曲です。この曲はNHKの「プロジェクトX～挑戦者たち～」のテーマソングとしても使われていたことはつとに知られています。

NHKの「プロジェクトX～挑戦者たち～」は、残念ながら事情があって2005年末を以って打ち切られました。無名の戦士に焦点を当てたドキュメンタリーを伝える精神は、皆様もご承知のように、翌年1月から放送を開始した『プロフェッショナル 仕事の流儀』に継承されています。

「地上の星」～ヘッドライト・テールライト～の歌詞をよく読んでみますと、下から目線で底辺にいる人たちへのメッセージのようにも読めます。それは社会を支えるインフラの建設・維持・管理に関わる土木技術者の思いにも通じるようです。そのことは、2002年第53回NHK紅白歌合戦の時の映像が如実に物語っています。青函トンネルの現場から送られてきたシーンは思わず目頭が熱くなるくらい感動的であったと記憶しています。

一方、「地中の星」は、読まれた方もおられると思いますが、門井慶喜著の最近の小説です。“地中の星”とは、地下鉄建設に情熱をかけた早川徳次と彼らを取り巻く人物たちのことで、作品の内容はわが国最初の地下鉄建設の壮絶な戦いと葛藤とロマンが独特の筆致で描かれています。個人的には、土木技術者必読の書といえそうな気がしています。中でも、早川徳次（東京地下鉄道(株)創設者、後の東京地下鉄(株)）と五島慶太（東京高速鉄道(株)創設者、後の東急グループ創始者）の経営者としての戦いは壮絶で驚嘆するばかりです。

実は、この「地中の星」を知ったのは、筆者の好きな女優の一人の中江有里がテレビのある書評番組で紹介されていたからでした。中江有里は昔、NHKの「週刊ブックレビュー」という番組で故・児玉清のアシスタントをしていたころから、なかなかの読書家として知っていましたが、本書のようなあまり華々しくない、どちらかという地味な作品にも目を向けられていることに改めて敬服しているところです。

中島みゆきの音楽と門井慶喜の文学という違った領域から、異なる視座に立ってプロフェッショナルを描いているようですが、創作者の意図があったかどうかは別にして、土木技術者への讃歌という点では共通していると筆者は感じています。

土木技術者の苦闘とロマンを描いた小説としては、「高熱隧道」（吉村昭、1967）や「無名碑」（曾野綾子、1969）をはじめとして幾つかありますが、映像化されたものとしてよく知られているものには、「黒部の太陽」（1968年、日活、原作・木本正次、1964）や「海峡」（1982年、東宝、原作・岩川隆、1982）などが代表的なものとしてあげられます。“大災害時代”として土木技術者の役割が再認識されつつある今、「地中の星」もぜひ、映像化してほしいものと密かに念じています。

“あこがれは 今や儚く 消えたれど
想いは続く 物書きの道”
(代表理事 安原一哉)